様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月　４ 日現在

機関番号：３５４０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００７９５

研究課題名（和文）同時通訳における認知処理の明示化：全体的処理と部分的処理の統一的記述

研究課題名（英文）Explication of cognitive process during simultaneous interpreting: Integrated description of global and local processing

研究代表者
石塚　浩之（Ishizuka, Hiroyuki）

広島修道大学・人文学部・教授

研究者番号：４０７３７００３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、同時通訳付記者会見から構築した同時通訳データベース （JNPCコーパス） に基づく訳出分析により、同時通訳の基盤となる認知処理を明示化した。特に原発話に対応する要素のない指示詞が訳出に現れる現象に着目することで、同時通訳における順送り訳が漸進的・全体的と逐次的・局所的処理の両面が並行して進むことにより実現されていることを実証的に示した。さらに、相関モデル（船山, 2020）に立脚し、通訳者の認知処理の根底に通訳者の対人認知の働きがあることを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　通訳教育においては常に「言葉にこだわらずメッセージをとらえよ」と語られる。しかし、言葉とメッセージの違いに関する説明には不十分な領域が多く残されている。本研究は、同時通訳データに頻繁に現れる現象に注目し、その背後にある認知処理を分析することで、同時通訳の順送り処理を可能とする認知処理の特徴を漸進的・全体的処理と逐次的・局所的処理の並行処理として具体化した。さらに、その背景として、通訳者の対人認知の働きがあることを指摘した。これにより、通訳者養成の訓練に理論的根拠を与えるとともに、同時通訳の仕組の理論化を試みた。

研究成果の概要（英文）：This study elucidates the cognitive process underlying simultaneous interpreting through an analysis based on a simultaneous interpreting database (JNPC Corpus) constructed from actual interpreting for press conferences. It particularly focuses on the phenomenon where additional demonstratives, which do not correspond to any element in the source speech, appear in the target language. This demonstrates that simultaneous interpreting is achieved through a parallel process of both incremental-global and sequential-local processing. Furthermore, it is pointed out that interpreters' interpersonal cognition involved in their performance, based on the Correlational Model (Funayama, 2020).

研究分野：通訳研究

キーワード：同時通訳　順送り訳　相関モデル　心の理論　対人認知　通訳訓練　認知処理　通訳教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1)　通訳教育における心的表示：通訳の認知的研究としては、1980 年代の終わりから、実証的・科学的な手法を全面的に打ち出す研究が多くなされてきた。現状としては、作動記憶の制約など、量的な観点から同時通訳の仕組を説明しようとする試みは多いが、心的表示の内実といった質的側面については、ごく一部の例外を除き手つかずであり、多くの論点が残されている。

(2)　相関モデルの構築：語用論、認知言語学、認知心理学など、関連分野の発展を受け、発話理解における心的表示の内実を考察するための理論基盤が整いつつある。船山は、1990 年代以来、同時通訳における時系列に沿ったディスコース処理に注目し、諸分野の成果を取り入れつつ、言語コミュニケーションにおける心的表示のあり方の理論的記述を試みてきた。この成果は言語コミュニケーションの概念-意味相関モデル（以後、相関モデル）として提案した。

(3)　同時通訳における時間軸に沿った処理：研究代表者の石塚は、船山の理論の展開と足並みをそろえ、同時通訳の認知処理明示化の手法を開発してきた。近年は原文の情報順序を保持した訳出、すなわち「順送りの訳」に注目し、（非言語的）概念の働きに加え、作動記憶の制約も含め、原発話を聞き、全体の理解を探りつつ、順次訳出する同時通訳の認知処理に関する論点を整理し、同時通訳の時間軸に沿った訳出処理に関する実証分析について予備的考察を進めてきた。

(4)　同時通訳データベースの完成：石塚・船山の両名は同時通訳データベース（JNPC コーパス）（基盤研究（B）課題番号 16H02915）の構築にプロジェクトメンバーとして貢献してきた。本データベースは特定非営利活動法人 言語資源協会を通じ、2020 年春に公開された。

２．研究の目的

(1)　コーパスの観察から、同時通訳の「聞きながら理解し訳す」という作業、すなわち、時間軸に沿った訳出処理を分析し、同時通訳の根底にある認知処理を明示化する。

(2)　特に原発話の内容について徐々に全体像を把握していく漸進的・全体的処理と、その時点で聞いた箇所の訳出を即座に繰り出す断片的・逐次的処理に注目し、具体的な言語データからその実態を記述する。

(3)　二言語間の変換の背後にある心的処理の働きを明らかにし、異文化コミュニケーションにおける言語とメッセージの関係を考察するうえで独自の視点を提供する。

(4)　従来、実務家の直観から語られてきた言葉のメッセージの関係について、同時通訳の認知処理の観点から説明し、通訳教育の現場に理論的な指導根拠を提供する。

３．研究の方法

本研究では、同時通訳の訳出を通訳者の認知状態の表出と見なし、処理対象である原発話との言語的差異を手がかりに、認知言語学的知見に基づき、原発話と訳出の（非）対応の定性的に分析する。これにより、測定機器による分析からは探ることのできない心的表示の内実を探り、時間軸に沿った通訳処理の実態を記述する。

理論的には、相関モデルを援用することで、通訳コミュニケーションにおける原発話者、通訳者、聞き手の３者の認知環境を同時に考慮し、言語レベルのやり取りと概念レベルのやり取りを区別することで、非言語レベルでの認知処理における情報を整理し、通訳コミュニケーション全体の中で、どの時点で、どのような情報が、どのような役割を果たしていたかを詳述することができる。

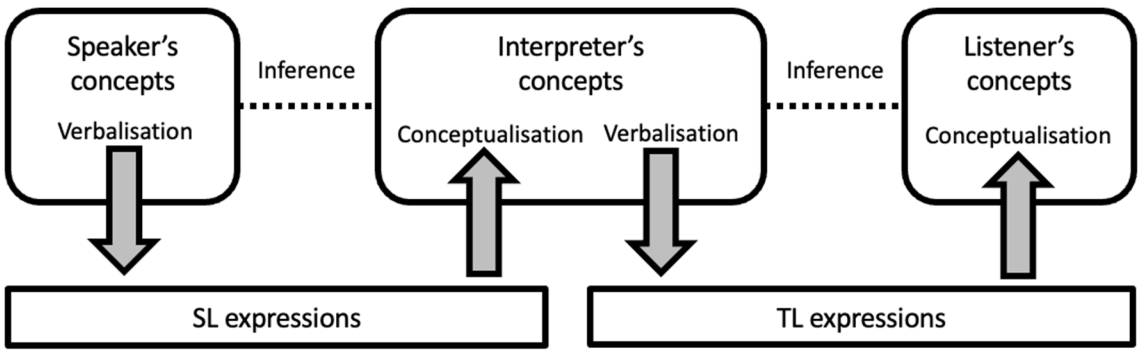

図１　相関モデルの通訳コミュニケーションへの拡大

具体的には、以下の処理を明示化する。(1) 分割の実態：同時通訳の逐次処理はどのような単位で実現されているのか。(2) 保持情報の実態：どのような先行情報がどのように保持されているのか。保持情報は原発話の言語形式とどのような関係にあるのか。ディスコースの展開において、この保持情報はどのように変容するのか。 (3) 情報組換えの実態：原発話から得られた情報は訳出にあたり、事態把握の変更などの操作が加えられるが、どのようなとらえ直しが行われ

ているのか。
　近年、通訳翻訳の認知処理研究の多くは、視線計測、打鍵記録、脳機能画像法、瞳孔測定などの測定装置を使用し、実験参加者の反応を定量的に観察するものであり、発話理解の質的側面を対象とするものはない。本研究では、同時通訳の訳出を通訳者の認知状態の表出と見なし、測定機器による分析のみからは到達することのできない心的表示の内実を記述する。

４．研究成果

(1) 本研究課題の一部は、日本通訳学会の「順送りの訳」研究プロジェクトと連携して進めた。その成果は、令和 4（2022）年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）（研究成果公開促進費、課題番号 22HP5056）として採択され、『英日通訳翻訳における語順処理　順送り訳の歴史・理論・実践』として、2023 年にひつじ書房より刊行した。第 2 章「「相関モデル」から見た順送り訳」（船山）では、英語から日本語への翻訳例を相関モデルの視点から捉え、訳出順序の概念的側面を考察した。典型的に順送りとなる訳出を可能とする要素について相関モデルの視点から具体例を示すことによって、読者の概念的理解と翻訳作業を支える概念的操作がどう連繋するかを示した。

(2) 同書第 3 章「順送りのための概念操作」（石塚）では、言語レベルを超えた概念レベルの処理の観点から、順送り訳を支える認知処理を記述した。本研究では同時通訳における言語的特徴のひとつとして起点テクストに対応する要素のない指示表現の目標テクストへの追加に注目し、順送り訳の背後に働く概念操作は、統語的差異の克服が必要とされる局面だけではなく、常に実行されている恒常的処理である可能性を指摘した。本稿は 2021 年に *MITIS Journal 2(3)* に発表済み（pp.11-32）の論文を基にしており、コミュニケーションとしての通訳翻訳の観点から、翻訳単位の位置づけを再考し、概念から言語表現の産出過程における情報構造の位置づけを明らかにした。

(3) 日本通訳翻訳学会第 23 回年次大会（2022 年 9 月）では、通訳データベース（JNPC コーパス）に含まれる同時通訳付記者会見（記録時間 43 分 16 秒）のうち、典型と思われる 1 例の詳細な分析を示した。この研究では、追加的指示詞のうちとくに直示用法に注目し、通訳者による情報保持の観点から、相関モデルにおける推論ルートの働きを指摘した。

(4) 日本通訳翻訳学会通訳コミュニケーション研究プロジェクト第 1 回研究会（2023 年 1 月）では、同じ同時通訳記録の分析に量的手法を取り入れ、収録時間 43 分 16 秒の同時通訳記録における追加的指示詞の分布を分析した。今回の分析は、技術的側面としてメタ表示が積極的な役割を果たす例を示し、基盤的側面として言語的置換を超えた対人認知の働きを指摘した。

(5) ロンドン大学 SOAS の Centre for Translation Studies 主催の Global Seminar Series (2023 年 2 月)での講演を行った。ここでは、特に基盤的側面からの分析に焦点を絞り、コミュニケーションの基盤をなす共同注意の観点を組み込むことにより、同時通訳における認知処理を対人認知の実態を含め記述した。

(6) Université Libre de Bruxelles, Solbosch Campus にて開催された 18th International Pragmatics Conference(2023 年 7 月)での発表は、これまで進めてきた追加的指示の訳出の分析を引き継ぎ、同時通訳者によるオンラインのディスコース処理の基盤となる対人認知の実態を同時通訳コーパスの分析から記述した。分析は量的側面と質的側面を組み合わせ、形式が限られており検索可能な指示詞に注目することで、対象とする現象の選択が恣意的になることを避けつつ、オンラインのディスコース処理における指示詞の表出を起点テクストと目標テクストの双方から観察することにより、個別の現象の具体性を捉えることを意識した。理論的枠組みとしては意味相関モデルに立脚しつつ、認知心理学的な議論を参照し、「心の理論」を基盤とする対人認知が言語使用の根底にあるというトマセロの主張との整合性を確認した。

　この研究課題は、同時通訳の認知処理を全体的側面と部分的側面の両面から統一的に記述し、基盤的な側面と技術的側面からの再考によって、新たなアイディアを得ることができた。一方、本研究の手法と問題意識に基づく派生的発見として、同時通訳におけるオンラインのディスコース処理の結果として実現される順送りの訳出において、通訳者は 2 つの異なるレベルで情報パッケージングを実行していることを見出し、これは独立した論文（Two levels of information packaging and cognitive operations during simultaneous interpreting: An analysis via additional demonstratives. Ampersand, 12）として発表の予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 石塚浩之	４．巻 32
２．論文標題 通訳に関わる二つのレベル？！－相関モデル	５．発行年 2021年
３．雑誌名 通訳翻訳ジャーナル	６．最初と最後の頁 126-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石塚浩之	４．巻 23
２．論文標題 （書評）船山仲他『自然言語をめぐる秩序　言語化と概念化	５．発行年 2021年
３．雑誌名 通訳翻訳研究への招待	６．最初と最後の頁 157-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 石塚浩之	４．巻 33
２．論文標題 通訳初心者が言葉にとらわれるわけー意味の無意識仮説	５．発行年 2022年
３．雑誌名 通訳翻訳ジャーナル	６．最初と最後の頁 123-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石塚浩之	４．巻 2
２．論文標題 順送り訳のための概念操作-英日同時通訳における指示表現の追加-	５．発行年 2021年
３．雑誌名 MITIS Journal	６．最初と最後の頁 11-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Hiroyuki Ishizuka
２．発表標題 Interpersonal cognition in simultaneous interpreters’ discourse processing
３．学会等名 18th Internatonal Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Hiroyuki Ishizuka
２．発表標題 The Role of Additional Demonstratives and Interpersonal Cognition in Simultaneous Interpreting
３．学会等名 SOAS CTS Global Seminar Series 2022-23（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 石塚浩之
２．発表標題 同時通訳における追加的指示詞から探るメタ表示の役割: 技術的側面と基盤的側面
３．学会等名 日本通訳翻訳学会通訳コミュニケーション研究プロジェクト第1回研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 石塚浩之
２．発表標題 同時通訳における情報保持：相関モデルの立場から
３．学会等名 日本通訳翻訳学会第23回年次大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 船山仲他
２．発表標題 概念処理と訳出の順序
３．学会等名 日本通訳翻訳学会「順送りの訳」研究プロジェクト第7回研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 船山仲他
２．発表標題 言語コミュニケーションは何で支えるのか
３．学会等名 日本通訳翻訳学会関東支部第56回例会
４．発表年 2020年

１．発表者名 船山仲他
２．発表標題 順送り訳を支える概念操作
３．学会等名 日本通訳翻訳学会「順送りの訳」研究プロジェクト第９回研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 石塚浩之
２．発表標題 順送り訳研究への序論
３．学会等名 日本通訳翻訳学会「順送りの訳」研究プロジェクト第９回研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 石塚浩之
２．発表標題 順送り訳のための概念操作-英日同時通訳における指示表現の追加-
３．学会等名 日本通訳翻訳学会「順送りの訳」研究プロジェクト第10回研究会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

１．著者名 石塚　浩之	４．発行年 2023年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 344
３．書名 英日通訳翻訳における語順処理	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	船山　仲他 (Funayama Chuta) (10199416)	神戸市外国語大学・外国学研究所・名誉教授 (24501)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関